

## 子宮がん検診（施設）

### 動 向

平成12年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん15,715名（前年度比790名増）であった。また体がん2,553名（前年度比44名の増）であった。昨年度より受診者数は微増傾向に転じここ数年来の受診者数減少に歯止めがかかった証しなら幸いである。

最近の受診者減少傾向の原因として、健康保険組合の財政逼迫による主婦検診事業の縮小や受診者負担金の増大などが一因と考えられ、協会としては個人としての受診勧奨を継続的に行なってきた。老人保健法によるがん検診事業の一般財源化は職域検診を中心である本事業には大きな影響はないようであるが、老人介護、生活習慣病対策へと大きく転向した行政側の姿勢が一般受診者の心理に影響して、がん制圧の意欲に陰りをきたさないことを願っている。今後も再診率向上の啓蒙活動と、窓口での受診勧奨等による更なる初心者の拡大を目指す方針である。一方、最近の生活様式の変化に伴い若年層における子宮がん罹患率の上昇が報告されているが、この年代に対する検診体制の整備も今後の課題であろう。

当協会では女性のためのトータルなヘルスチェックができる機会として、人間ドックや各種の健康診断で健康づくりのための運動指導、保健相談など、健康問題を総合的にアドバイスできるようプログラムを設定している。

### 子宮頸がん検診

平成12年度の子宮頸がん検診受診者数は15,715名であった。このうち初診は3,476名で22.1%であって、昨年度より4.1%の増であった。

年齢群別に総受診者数に対する割合をみると、50歳代が5,887名で37.5%を占め最も多く、20歳代、初診は91名で0.6%を占めるにすぎず、通年の傾向に変化は見られなかった。がんの若年化傾向が指摘される中、若年者の受診勧奨の工夫が望まれるところである。

細胞診クラスIIIa以上のものは72名で受診者の0.5%にみられた。頸がん発見数は15名、発見率0.10%であった。内訳は、クラスIIIaから頸がんO期1名、頸部腺がん1名、クラスIIIbから頸がんO期2名、クラスIVから頸がんO期4名、Ia期1名、クラスVから頸がんO期

2名、Ia期1名、頸部腺がん2名、この他クラスII再検としたものから頸がんO期1名と上行結腸がん1名、同じく異所性細胞混入を疑ってクラスIIIaとしたものから体がん1名が発見されている。異形成発見数は35名（発見率0.2%）、軽度異形成25名、中等度異形成7名、高度異形成3名であった。又軽度異形成を中心とした経過観察者群133名から体がん1名が発見された。

### 子宮体がん検診

子宮頸がん検診受診者のうち子宮体がん検診をうけたものは2,553名で頸がん検診受診者の16.2%を占めた。体がん検診対象者の選び方は、概略老人保健法による健康診査マニュアルに準拠しているが、健康保険組合によって対応は異なるようである。2,553名の対象者のうち頸管狭窄、頸管の屈曲などの理由で吸引チューブが挿入できず、経腔エコーによる内膜測定を行った79名を除いては吸引法による内膜細胞診を施行した。

内膜細胞診の結果、疑陽性3名、陽性4名が検出され、精検の結果、I期体がん2名、内膜増殖症1名が発見された。陰性と判定しながらも要再検とした32名については再検の結果異常はなかった。内膜細胞診を施行しながら、内膜の萎縮、出血等の原因で判定不能となったものは119名（4.7%）であった。

### 卵巣がん検診

一次検診で内診の結果異常を触知したものや希望者に対し、経腔エコーを主体として腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設している。平成12年度の受診者は214名であったが当クリニックからの卵巣がんの発見はなかった。

### 女性クリニック

保健相談室の協力を得て女性クリニックを開設している。平成12年度の受診者は、初診26名、再診158名、計182名であった。昨年度は19名増、今年度は33名増であって順調に運営されていると考えられるが、初診者数は毎年略同数で再診者数が増加傾向にある。年齢層別には50才～55才を中心に45才～60才代に多く、更年期特有の愁訴の著しい婦人に対するホルモン補充療法に対する要望が多い。

関係の集計表は113～115頁に掲載